

オタワから新たなMDT仲間とともに

佛坂 俊輔（平3卒）

2017年に佐賀県医療センター好生館を出て以来、それまで続けていた手外科の手術を中心とした診療をやめて、マッケンジー法（MDT, Mechanical Diagnosis and Therapy、以下MDT）を実践するようになった。以後その姿勢には変わりなく、症例は日々積み重なり自らの診療記録ともなっているブログ「マッケンジー法・症例ファイル」での紹介症例も300例ほどになった。その途切れのない日々の症例を2022年4月1日から2023年3月31日までの1年間で切り取り、MDTによる評価・分類の結果をまとめ、2024年8月9日～2024年8月11日の期間にオタワで開催されたMDTの国際学会、The 15th International Conference in MDTにおいてポスター発表する機会を得たので、他の日本のMDT仲間の発表内容とともに報告する。

発表内容は2022/4/1～2023/3/31の一年間に初診からフォロー終了までを自ら診療完結した外来の全症例を振り返り、全ての部位を含めMDT分類を行うとどのような割合になるのかをまとめたもので、Derangement[※]の割合はRosedaleら¹⁾が報告している結果と類似したもので目新しいものではなかったが、国際認定資格（国際マッケンジー協会認定資格、以下Cred.）を有する日本の整形外科医が外来診療の場で全ての患者を評価して分類したというデータは珍しいため演題が採択されたのかと思われる。これまでも整形外科医として手外科関連の海外の学会に参加したことは何度かあったが、今回の学会では世界各国から380名ほどのMDTセラピストを中心とした医師・コメディカルが集結し（Fig. 1）、さまざまなプログラムを通して研

鑽と意見交換を行う場が提供されていて、医師中心の医学会とは一味違う国際学会であった。

日本からは上級資格であるディプロマ（Diploma: The Diploma in Mechanical Diagnosis and Therapy[®]、国際マッケンジー協会理事会が承認したディプロマ課程を全て修了し授与される資格、以下Dip.）であり国際マッケンジー協会講師の1人である佐野華（敬称略、以後同行者の敬称全略）を筆頭に、Dip.伊藤博子、Cred.藤原貴希、埼玉県立大学准教授のCred.高崎博司、そしてその門下生で日本の若きMDTホープであるCred.千葉弘樹と私の6名で参加した。

日本勢は会場でも団結し、千葉の口演では最前列のテーブル席を日本勢で埋めて応援した。発表はMDT関連リサーチの現況と、ケーススタディに加え、さらにエビレンスレベルの高い研究へと、まだまだエビデンスの少ないMDTの研究にどのような視点が必要なのかという学会全体の研究活動にポジティブな影響を与える力強い発表で、多くのセラピストの注目を集めていた²⁾。

高崎のポスターは非急性期の頸部痛の患者に対し、頸椎伸展またはリトラクション（Retrac-

※ Derangement : Directional Preference（良い反応を引き出せる特定の運動の方向のこと）が存在し、比較的短期間（評価実施の即時から遅くとも数日間程度）で症状が消失する、または改善が見られるもの。



Fig. 1 学会メイン会場、2024年8月9日 The Westin Ottawaにて

tion：顎を引くような動作で得られる上位頸椎屈曲と下位頸椎伸展の複合運動）のDirectional Preferenceを有する患者におけるリトラクション運動の即時的な頭痛緩和効果についての研究報告であった。頸椎に関するMDTの研究はまだ多くないものの、臨床でMDTを実践しているセラピストはMDT分類に基づいたエクササイズで患者の症状が速いスピードで改善する現象を日常的に体験していることについて、一つのエビデンスを提示するものとなっている。DPの存在する患者では、適切な運動方向への介入により早期に症状が改善するが、この現象をMDTの知識のない医療者に説明するのが難しい。目の前で起きているMDTの即時効果や、長期的な有用性を他者に公正に伝えるにあたりこの高崎の発表のようにMDTに関連した基礎研究が果たす役割は大きい³⁾。

また数名のポスター演者が次々とそれぞれ1分の持ち時間に口演でポスター内容を紹介する

Rapid Fire Poster Sessionという、いわばポスターへ足を運んでもらうためのショーケースのような口演セッションもあり、一枚のスライド（Fig. 2）を使ってポスターの概要を紹介した。久しぶりの英語スピーチで、歳のせいかな原稿なしでの口演には1分では頭の切り替えもできないまま終わり、辿々しい口演となったが、会場からは温かい声援をいただき、加えて最後に軽いジョークで会場の笑いをとることもできて安堵した。

MDTといえば腰痛を中心とした脊椎の評価・治療法だと捉えている方がまだ多いかと思われるが、すでにMDTは四肢の評価でもDerangementではない場合のマネジメントをどう行うかというところにまで踏み込んでいる。MDTで大きな割合を占めるDerangementを見つけ出し、そのマネジメントをどのように行うのかについてはほぼ確立されているものの、Otherと称される、その他の様々な疾患群のマネジメントに

Classification of Outpatient Cases by Orthopedic Specialist with MDT Certification in Japan

A series of **132** patients classified by MDT

All evaluated by myself to the end of follow-up

MDT is potentially reducing unnecessary medication or surgeries

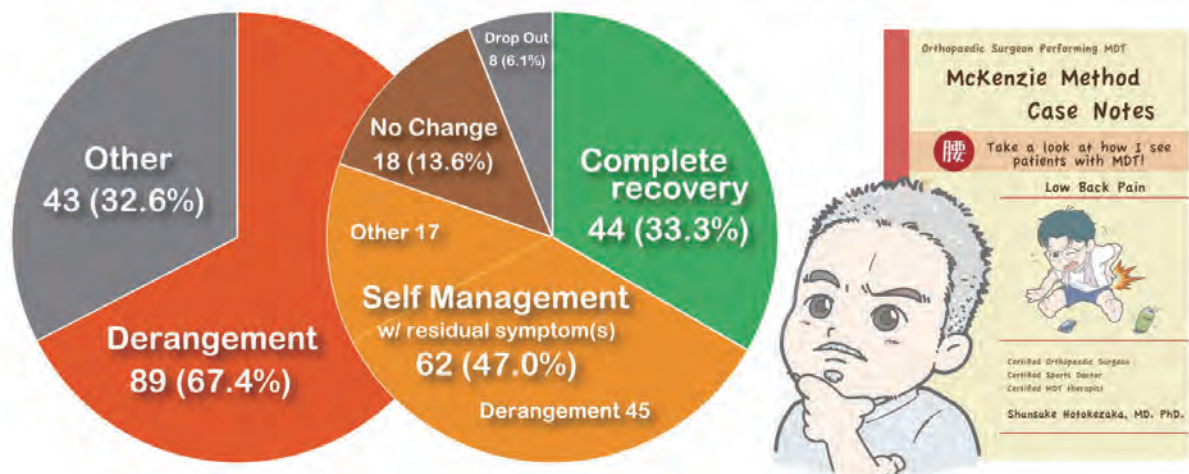


Fig. 2 Rapid Fire Poster Sessionのスライド

についての具体的な内容は先送りにされている状態が長く続いていた。今回の学会ではこのような現在のMDTにおける解決すべき問題が意識されている学会であったように思う。

さらに、脊椎の評価・治療を主軸に発展してきたMDTを意識して企画されたと思われる、Beyond the Spine（脊椎を超えて）というセッションでは、MDT分類において Dysfunction と呼ばれる治療に比較的時間を要する疾患群の病態に関連した腱のマネジメントが紹介された。聴衆参加型のセッションで、腱にどの程度の負荷をかけるべきかを直接体験しながら理解を深めることができる構成で、理論と実践を織り交ぜたセッションであった。講義ではスポーツ整形外科でも必要な知識である腱障害の回復にお

ける適切な負荷管理の重要性が強調されていた。脊椎だけではなく四肢の問題も包括的にマネジメントできる医療システムとしての充実を目指している学会の方向性が確認できたセッションであった。

そして会期中のモーニング、ランチ、コーヒーブレイク、学会後の懇親会なども他の参加者と楽しく意見を交わし、また、同行した伊藤はディプロマプログラムの留学先で師事した講師や伊藤と同時期に Dip. となるために留学していた世界中のMDT仲間との交流の場を設けてくれて、伊藤を通じて海外のDip.とも広く交流できた。

創始者のマッケンジー先生は2013年に亡くなり、またマッケンジー先生の親族も参加がない初めての国際大会だったにもかかわらず、380名ほどの参加者がさらに精進せんとMDTに向き合う姿をみて、マッケンジー先生の精神は脈々と受け継がれ発展を続けているのが感じられ、手外科の世界を抜け出てMDTを第2のライフワークに選んだことが正しかったと確信した。

これからMDTを実践する仲間と共に、日本の臨床の現場でも、さらには日々の生活の中でも当たり前の様にMDTの考え方が浸透している社会を目指して、残りの臨床家としての人生を捧げたいと考えている。

【参考文献】

- 1) Rosedale R, et al. A study exploring the prevalence of Extremity Pain of Spinal Source (EXPOSS). J Man Manip Ther. 2020;28:222-230.



- 2) Hiroki Chiba, et al. Research Priorities in the Mechanical Diagnosis and Therapy Among



Diploma Therapists: An International Delphi Study
Cureus. 2024 Jun 16;16(6):e62492.

- 3) Hiroshi Takasaki, et al. Immediate neck hypoalgesic effects of craniocervical flexion exercises and cervical retraction exercises among individuals with non-acute neck pain and a directional preference for retraction or extension: preliminary pretest-posttest randomized experimental design
J Man Manip Ther. 2023 Apr 13;31(5):368-375.



〒819-1112福岡県糸島市浦志532-1
糸島医師会病院 整形外科
佛坂俊輔
e-mail: hotokezaka@gmail.com